

IV 神森智先生を偲んで

神森智先生のご逝去を偲んで

小西 範幸（国際会計研究学会会長・青山学院大学）

国際会計研究学会の第 6 代会長（1996 年 - 1999 年）の神森智先生（松山大学名誉教授）が 2021 年 8 月 24 日にご逝去されました（享年 95 歳）。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

神森先生は、本学会に多大な貢献をなされ、会長を退いた後も学会功労賞授賞会員として、また顧問としてその任を全うなされました。神森先生の生前の御遺徳を偲び、会員を代表してとくに親交の深かった野村健太郎先生（第 10 代会長）、古賀智敏先生（第 11 代会長）、橋本尚先生（第 12 代会長）、および杉本徳栄先生（第 13 代会長）から寄せられた追悼文を掲載して、神森先生の御冥福をお祈りすることと致します。

神森先生の会長就任期間に、その多くが在外研究期間と重なったこともあり、神森会長のお役に立てなかったことは残念でなりません。私が本学会の幹事および理事を務めている時に、神森先生は顧問として、理事会の案内に対して、お人柄を現わすとても親身で丁寧な返信を毎回なされていたことを覚えています。

神森先生は、1927 年（昭和 2 年）9 月 23 日に広島県でご出生なされました。広島財務局等での勤務、そして特別公認会計士試験合格の後に松山商科大学短期大学部専任講師となりました。松山大学理事長・学長などを経て 1994 年に退職なされ名誉教授となり、その後、東亜大学経営学部長などを務めた後に、2004 年から再度、松山大学学長を務められました。本学会会長の他にも、税務会計研究学会副会長などを歴任され、『税と経営のための経理実務』（西日本税務協会、1957 年）、『財務諸表論の理論と計算』（税務経理協会、1971 年）、『財務会計と財務諸表監査—その存在論的考察と当為論的考察』（同文館出版、2011 年）などを公刊なされています。

神森先生の会計・税務研究の発展に向けたご尽力とご貢献に心から敬意を表する次第です。ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

神森智先生の御逝去を悼む

野村健太郎（国際会計研究学会第 10 代会長、大分大学名誉教授）

神森智先生 2021 年 8 月 24 日に御逝去されました。心から哀悼の意を捧げます。先生は松山大学名誉教授、博士（学術）、国際会計研究学会顧問（第 6 代会長）として、多くの麗名を現有されました。

2018 年 4 月に卒寿記念出版として『税務会計と財務会計 —巨視的観察による税務会計総論—』（399 頁、非売品）を出版されました。本書は 3 部構成であり、第 1 部の「税務会計と財務会計」

は学術論文編であり、第2部は「協賛論文」編であり、最後の第3部は「自分史」としての神森先生の自叙伝である。

第1部の学術論文が画期的な優れた業績であり、税務会計学のあり方の展開であり、卓越した所説が表明されている。税務会計のスタンスを徴税者的アプローチと納税者的アプローチに二極対立させ、納税主体論的に歴史の変遷を鮮明に検証された分析は税務会計の真髄に迫る画期的な論考として高く評価される。

神森先生は企業体理論的税務会計論又は付加価値税務会計論が「国民経済的にも合理性があり、前向き志向である」として「企業会計においては、企業体理論又は付加価値会計は、元来、現代会計における企業のもつ社会性・公共性の認識の上に、これに対応した会計システムとして考えられたものであることに思いを致すと、現代社会にマッチした税務会計論は、まさに、また、おのずから、企業体理論的税務会計論又は付加価値税務会計論に向かうことになるのではないか」という所見が表明されている。画期的な論考であると評価されよう。

さらに本書において、「財務会計原理と税務会計原理」と題し、両者について原理的視点から高邁な所論を租税負担の公平性と逆基準性をメルクマールとして、引当金繰入額及び圧縮損に関連して資本取引と損益取引の区別について取り上げ深みのある広汎な所論を展開されている。

さらに本書において「財務会計における計算は、利益の測定を中心課題とするものに対し、税務会計における計算は、租税負担の公平の理念の拘束から逃れ得ないものであって、両者は、自ずからその原理を異にするものであり、引当金繰入額のように、その計算が、財務会計上当然のルールとされているものであっても、これを課税所得計算上のルールとして持ち込むことには、税務会計原理の見地から問題が存するとともに、引当金繰入額に係る税法基準や圧縮損の計上のように、税務会計上認められているからと言って、これが、そのまま財務会計上の計算に用いられることは、財務会計原理の見地から問題のあること」と主張された。

さらに、本書で重大な問題提起として、「税務会計上の確定決算主義または確定決算の原則への疑問である」とし、「確定決算主義なるものの存するが故に、財務会計の主体性及び純粋性が阻害されている面があることは否めない事実であるから、これを廃止し、いわゆる申告調整の余地に制限を付さないことにすることによって、財務会計も税務会計も、ともに、その原理に忠実な計算をなしうる道が開かれることになるのではなかろうか」と提言された。

以上、神森智先生が長きに亘って注力されてきた証しとして卒寿記念論文集を中心として、その業績の一端を披露してきた。先生のこれまでの時代時代に即応した課題をリアルにとり上げ研究されてきた御貢献は頭の下がる功績であり、それをモノにされた力量に対して深く敬意を表するものであり、御逝去の報に接し心より哀悼の意を表します。

神森智先生のご逝去を悼む

古賀 智敏（国際会計研究学会元会長）

2021年8月24日、本学会の第6代会長で、顧問として学会を指導してこられた神森智先生がご逝去された。わが国会計研究・教育・制度にわたって長年牽引してこられた偉大な先生をまた一人失った。松山大学（旧松山商科大学）でのゼミ指導では畏敬の念を込めて「鬼の神森」と称された先生は、学会で私どもとお会いした時など、いつもにこやかに声をかけ、激励してくださった。亡き恩師、武田隆二先生と大変親しく、松山大学には神戸大学からも多くの関係者を採用していただいた。

30年ほど前に米国テキサス大学に客員研究員として在外研究を行った折にご一緒だった森本三義教授（その後、松山大学学長）は、神森ゼミ出身であったことを後に知った。このように、神森先生との直接のお付き合いは、かなり限定的なものであったが、ご玉稿を晩年まで執筆され、斬新なお考えに身の引き締まる思いはしたことは忘れられない。先生が晩年に精力的に取り組まれていた中小企業会計や税務会計の概念フレームの構想は新鮮であり、神森先生の研究に対する真摯な思いと姿勢には敬服するばかりであった。

神森先生のご研究の特徴は、古稀記念論文集『概説企業情報提供会計』（同文館、1998）の「はしがき」に「高い労働生産性、高品質、製品多様性」（ii頁）の三本柱として端的明快に纏められているので、これを参考に神森会計学の一端を抽出してみたい。

第1に、神森先生の「研究生産性」の高さは、同記念論文集が出版された20年前当時で著書32冊（うち単著13冊）ほか、研究論文、辞典・ハンドブックなど圧巻であり、大学退職後の4年間に新たに著書4冊、論文など8編、驚くばかりである。これは、研究に対する先生の厳しい姿勢と情熱によるものであり、その根底には旧大蔵省税務講習所広島支所（現国税庁税務大学校広島研修所）での指導活動を経て簿記教育の教育キャリアを歩み始め、それ故、指導教授のもとで「計画的・組織的に研究するということもなく」（『財務会計と財務諸表論』2011、同文館「まえがき」(2)）、「分不相応に大学の教員として禄を食んだ」（同「まえがき(4)」）という、大学人としての強い自覚と責任感に少なからず影響されたものではなかっただろうか。その謙虚なお気持ちに恐れ入るばかりである。

第2に、神森論文の「高品質性」を示す一例として、1959年に学内誌で掲載された「企業会計の利害調整機能」の論文が、1997年に染谷先生編集『我が国会計学の展開』の1つに選ばれたことが挙げられる。後で「大変面映ゆる思いをした」（同「まえがき(2)」）と吐露されているが、それがその後の先生の膨大な研究の体系化の引き金になったことは疑問の余地はない。神森理論の特徴の1つは、企業会計の職能論としての、いわゆる利害調整論の内容的脆弱性を鋭く論究されている点にある。たとえば、「利害調整論は、全体として、きわめて粗雑な議論である」ばかりか、「まったく事実と反しており、逆に、企業会計が、利害関係者をあざむき、その利益を害していることこそ、現実の姿である」（同上書45頁）と言明される。その背後には、わが国の会計実務と監査実態に精通された神森先生の鋭い現実的視点が垣間見られる。

第3に、「研究の多様性」に関しては、研究分野が簿記、財務会計、管理会計、会計監査、税務会計、税法、商法、経営分析等々、そのレパートリーの広大さと深遠さには、ただ驚くほかはない。常に謙虚に、かつ厳しく自らを律して学究人生を邁進してこられた神森先生のお人柄と人生観が忍ばれる。しかも、大学の学長・理事長の要職のなか、それぞれの分野で会長・理事など学会・社会活動に励まれたことを知り、その超人ぶりに驚嘆し、敬服申し上げるばかりである。今はただ神森智先生の偉大なご功績を偲び、ご冥福を心からお祈り申し上げます。

神森 智先生を偲んで

橋本 尚（国際会計研究学会第12代会長・青山学院大学）

国際会計研究学会の創設時からの会員であり、第6代会長、学会功労賞授賞会員で顧問の神森智先生（松山大学名誉教授、元理事長・元学長）は、2021年8月24日にご逝去されました。生前の先生との思い出や教え・学びを記すことで追悼文と致します。

顧みれば神森先生との出会いは、1989年5月27日～29日に、日本会計研究学会の第48回全国大会が松山大学で開催された時であったと思う。懇親会の席で、染谷恭次郎先生と飯野利夫先生からそれぞれ紹介していただいたように思う。平成の時代が幕開けしたこの年、博士後期課程に在学していた私は、春休みにイリノイ大学に資料収集に行き、セミナーなどに参加した（マウツ教授夫妻にお目にかかった）ことで大きな刺激を受け、研究者の道を歩むことを決意した。その後、1996年11月30日・12月1日に、国際会計研究学会の第13回研究大会が東亜大学で開催された折に、準備委員長を務められた神森先生は、この研究大会において第6代会長に選出された。同じ年に駿河台大学経済学部に移籍した私は、お世話になっていた川北 博先生が準備委員長を務められていたことや小川 洌第5代会長の任期満了の年でもあったので、ふぐ料理を楽しみに初冬の新下関駅に降り立ったことが今でも懐かしく思い起こされる。

神森先生は、旧制松山経済専門学校（現在の松山大学）で経済学を学ばれ、広島財務局国有財産部に就職後、1948年から大蔵省税務講習所広島支所（現在の税務大学校広島研修所）教官として経済学を講義されていたが、その後、簿記会計を担当されるようになった。1951年には公認会計士試験第二次試験に、1952年には特別公認会計士試験に合格された。

先生は非常に厳しく、「鬼の神森」の言われていたようで、教室に入るとドアにカギをかけて授業を始め、学生の私語を決して許さなかったという。

神森先生の研究論文・学会報告やパネル・ディスカッションのテーマは、簿記原理、会計原理、企業会計原則論、財務会計総論、資金会計総論、財務諸表監査総論、商法会計総論、金融商品取引法会計総論、税務会計総論、中小企業会計総論、財務会計・商法会計・税務会計等に係る会計史など多方面にわたり、また、アメリカの銀行原価計算やアメリカの銀行財務状況の紹介なども精力的にこなされた。先生は、自律的に勉強したのは経済学だけで、他は簿記会計をはじめとして他律的な学習であったと述懐されているが、先生の探究心が、無意識のうちに学際的な広がりをもたらしたように思われる。先生は、「学問は竹林のように地下茎でつながっている。」とよく言われていた

が、このようなマクロ的な視点は、経済学的思考に根ざしたものといえよう。先生は、学会活動にも積極的に参加され、17の学会に所属され、そのうち10の学会で役員を務められた。本学会の会長としての経歴をプロフィールの冒頭に記されることが多かった。

本学会の初代会長の染谷先生は、1997年に『我国会計学の展開』（全3巻）（雄松堂）を編集・刊行されたが、その中には、神森先生が書かれた論文「企業会計の利害調整機能」（『松山商大論集』第10巻第3号、1959年12月発行）が収録されている。このことを神森先生は、「たいへん面映ゆい思いをした」と述べられているが、まさに先生のお人柄が滲み出ている言葉である。

学内でも先生は、1989年～1991年（第9代）と2004年～2006年（第13代）に松山大学理事長兼学長を務められた。2007年9月1日～3日には、日本会計研究学会の第66回全国大会が18年ぶりに松山大学で開催された。大会期間中の2日には、世界陸上の大阪大会の女子マラソンが行われたが、テレビには、驚異的な粘りで銅メダルを獲得した松山大学出身の土佐礼子選手を応援する先生の姿が映し出されていた。

私が本学会の会長に就任したころ（2014年～2017年）は、神森先生はご高齢だったこともあり、直接お目にかかることは叶わなかったが、理事会の案内のメールなどにはいつも丁寧なご返信を賜り、学会運営などについて数多くの貴重なご助言を賜った。

2016年12月には、「老化防止を兼ねた一種の生存証明のようなもの……」という添え書きとともに「資金計算書論と資金会計論—三つの資金会計論—」（『松山大学論集』第28巻第4号（川東 輝弘教授記念号）、2016年10月発行）の抜刷をお送りいただいた。

神森先生の国際会計研究学会への多大なご貢献に感謝致しますとともに、ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。及ばずながら本学会の発展のために引き続き尽力致したいと存じますので、先生、どうか安らかにお眠りください。 合掌

神森 智先生を偲んで

杉本 徳栄（国際会計研究学会前会長・関西学院大学）

神森智先生（松山大学名誉教授、国際会計研究学会第6代会長・顧問）が2021年8月24日にご逝去された。以前から少し体調がすぐれないとは伺っていたが、訃報に接し、本当に残念でならない。背筋の伸びた立ち居振る舞いがとても印象的だった。

神森先生は、常に国際会計研究学会の運営や事務局に気を遣われ、かねてよりメールでの連絡にいつも温かいお言葉を添えて返信をいただいていた。昨年（2021年）の1月初めに、本学会から神森先生にあるお願い事をしていただいていた。しばらくして、学会担当幹事から神森先生からの返信がないとの連絡を受け、あらためて書簡をお送りしたが、音信不通のままであった。このときすでに体調を崩され、闘っておられたのだと思う。

■神森先生との出会い

わたしが神森先生に初めてお会いしたのは、松山商科大学から松山大学に改称された1989年で

ある。その年の日本会計研究学会第 48 回全国大会は、5 月に神森先生を大会準備委員長として松山大学で開催された。当時、初めて搭乗した双発のプロペラ機（ATR ではなく YS-11 だったかと記憶する）で鹿児島から太陽の光が反射する伊予灘を眺めながらの松山入り。大会の懇親会会場で先生方から神森先生をご紹介され、物静かでニコニコされていたのが印象的だった。

これまで多くの学会の全国大会や部会などに参加してきたが、この松山での懇親会は今なお記憶に残る 1 つとなっている。学会の大会にまだ参加し始めだったということもあるが、懇親会は立食ではなくホテルでの着席スタイルで、とても豪華なものであった。学会として初めての懇親会スタイルだと伺い、いたく納得。それもその筈。神森先生は、その年の 1 月に学校法人松山商科大学（4 月に松山大学に改称）理事長並びに第 9 代学長、そして松山商科大学短期大学部（4 月に松山短期大学に改称）学長に就任され、まさに松山大学を代表する「顔」であり、全学を挙げてのおもてなしで、大規模な全国大会の開催だったのである。

■松山と言えば神森先生

松山と言えば、文学界では藩士子弟の正岡子規、高浜虚子、そして夏目漱石（金之助）が思い浮かぶ。松山に初めてベースボールを紹介したのは子規であり、漱石の『坊っちゃん』での生徒の乱闘騒ぎや「住田温泉」（道後温泉本館）での「坊っちゃん泳ぐべからず」の貼り札に結びつくシーンなどは鮮明に記憶に残っている。実際にこの貼り札を見ては感動したものである。

会計界で松山と言えば神森先生である。

商業実務家養成学校としての高等商業学校には、官立学校と私立がある。「松山高等商業学校創立史話」^(注) などによれば、私立の実業専門学校のなかで高等商業学校の名を冠する 3 番目の「松山高等商業学校」が創立されたのは 1923 年のことである。現在の松山大学は、この松山高等商業学校を濫觴とし、その後、松山経済専門学校、松山商科大学へと改称してきた。神森先生は 1947 年に松山経済専門学校を卒業され、出身地である広島での財務局や税務講習所などでの数年間の勤務を経て、母校の松山商科大学の専任教員として着任し、まさに後進の育成に努めてこられた。

松山高等商業学校、松山経済専門学校、松山商科大学、そして松山大学という沿革を有するなかで、2 代にわたって校長・学長を歴任したのは、学制改革で松山経済専門学校から松山商科大学に昇格する時期の第 4 代校長と初代学長であった伊藤秀夫氏と、松山大学に改称した年からの第 9 代学長（1989 年～1991 年）並びに第 13 代学長（2004 年～2006 年）を務めた神森先生だけである。お二人に共通するのは、大学の改称時にさらに飛躍するための重責を担われ、果たされたことにある。

松山大学を定年退職後、神森先生は東亜大学と呉大学（広島文化学園大学）でも教壇に上られた（東亜大学在職中に本学会会長にも就任し、会務運営などにあたられた）。その後、松山大学理事長・学長および松山短期大学学長としてあらためて迎えられている。その目的と最大の功績は、松山大学に薬学部を新設し、中四国屈指の私立総合大学を確立したことにある。その姓から親しみを込めて、神森先生が「神ってる～」とよく言われてきたことも納得がゆく（広島ご出身だからでもあるが、まさに元祖「神ってる」なのだ）。

松山と言えばではなく、中四国と言えば神森先生なのである。

■スパニッシュ・スタイル

松山大学と関西学院大学、そして西宮市は少なからずご縁がある。

関西学院大学は兵庫県西宮市に西宮上ヶ原キャンパスがある。クリーム色の外壁と赤い瓦屋根によるスパニッシュ・ミッション・スタイルの建物を特徴とする。実は、同じ西宮市に松山大学温山記念会館がある。これまた同じスパニッシュ・スタイルの洋館と庭園などからなるもので、旧新田邸である。関西学院大学時計台（旧図書館）は文化庁の登録有形文化財に指定されているが、この指定よりも数年前に、実に第13代学長時に松山大学温山記念会館の一連の建造物などが登録有形文化財となっている。いずれも桜並木が美しい新堀川沿いと学園花通りにあるという点でも共通している。

松山大学は温山会館とイチョウ並木が迎えてくれる。温山とは、松山高等商業学校の創設者である実業家・新田長次郎翁の雅号だ。

以前に特別番組「新田長次郎 100年の大計—その生涯と先見に学ぶ—」がテレビ放映されたことがある。俳優の大杉連さんがナビゲーターを務めていた。この特別番組は松山大学創立90周年記念番組として制作されたもので、画面に映し出された特別番組の表題文字「新田長次郎 100年の大計」は神森先生の筆によるものでもある。

2023年の松山大学創立100周年を迎える日を楽しみにされていたことは想像に難くない。無念極まりなかったと拝察する。

松山大学の校訓は、松山高等商業学校の創設以来、「三実」である。「真実」（真理に対するまこと）、「実用」（用に対するまこと）、「忠実」（人に対するまこと）の3つからなる。神森先生は松山経済専門学校で教えを受け、「いで湯と城と文学のまち」松山でこの三実を体現された先生であった。校章にあしらわれた伝統ある「マツダイの星型」を輝き続けさせ、本学会を含む会計学界も牽引してこられた神森先生に、感謝とともに、心から哀悼の意を表します。

（注）川東諍弘「松山高等商業学校創立史話」、『松山大学論集』第26巻第6号、2015年2月。この史話は、神森先生が一読のうえ貴重なコメントを提供されたものと付記されている。